
まほ×がく

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほ×がく

【Nコード】

N5370V

【作者名】

ユウスケ

【あらすじ】

受験を終えて見事、魔法学校である夕風高校に合格した京介。きょうすけお昼に一緒に弁当を食おうと友人達に誘われるが、弁当を忘れてしまっ
て

一人、食堂に行く事に。

食堂を目指して、廊下を歩く京介だが、近くにあった物置のような部屋から光を見た京介は光が気になってしまいつい物置に入ってしまう。

すると物置の中に一冊の赤く光る本を見つけ手にとって開くと・・・

o

ブローグ

受験で急がしかった一年間が終わりを告げ、僕は今日、高校生になった。

いつも通っていた道を通らず、新しい道を通り学校に向かう。

「よう、きょうすけ京介！」

校門の近くに来たときに、後ろから丸刈りの男子生徒が声を掛けてきた。

「おはよう。まこと正人がこんなに早いなんて珍しいね」

「さすがに入学早々、遅刻はしないさ」

この男子生徒の名前は、はせがわ長谷川 正人。

僕の中学からの友人で、よく一緒に遊んだりしている。

そんな僕の友人は、中学では遅刻の帝王と呼ばれていた。

「まあ、それが普通なんだけどね・・・」

少しため息まじりで言う正人は、なはは・・・と笑ってごまかす。

「そ、それよりもさ！早く、クラス発表の紙が張ってある掲示板を見に行こうぜ！！」

「そうだね」

正人は、あらかさまな話題変換をしたが、別にかまわないと思った

僕は話に乗ってみる。

「凄い人だな」

「たしかにすごい人数だね」

掲示板の近くまで来た、僕達が見たものは沢山の人ばかりだった。割り込もうかと思ったが、誰かが怪我をしたら大変だし、謝って女子生徒に何かしてしまったら

入学早々、良くて厳重注意、悪くて停学になってしまう。

だから僕と正人は人が減るのを待つことにした。

何人か校舎に入っていく、そろそろいいだろうと思った僕達は掲示板に行くと、

見覚えのある男子生徒が立っていた。

「お！京介に正人じゃないか、おはよう」

「おはよ、相馬^{そうま}」

「オッス！相馬！！」

掲示板の前に立っていた彼の名前は、九条^{くじょう} 相馬。

正人と同じ中学からの付き合いで、成績優秀、容姿端麗のかなりのイケメンだが、

彼の趣味が災いし女子に敬遠されている。

高校生活が始まったときはモテるだろうけど、きっとここでも敬遠されるだろう。

何故なら彼の趣味は・・・。

「正人、京介。今日の帰りに幼女を見に行かないか？」

笑顔で犯罪すれすれの事を言う相馬。

そう、このセリフを聞いて十人中十人が彼の特殊な趣味を理解するだろう。

彼は残念な事にロリコンだった。

初めてあった時はイケメンの優等生と思っていたのだが、時が流れるにつれてその頭角を現した。

一体、彼に何があったのだろうか？

「相馬、学校ではそういう発言はやめた方がいいよ」

「そうだぜ。俺達は相馬の事を理解しているから大丈夫だけど、他の奴が

聞かれたらかなりまずいと思うぞ」

今後、相馬の高校生活を考えると心配なので僕と正人は変態発言は控えるように言うのだが……。

「むう。いつか必ず同士を増やして、認めさせてやる……。そのためにはまず……」

相馬はあごに手をよせて、なにやら危ない計画を立て始めた。

正直、僕と正人の心配を返して欲しい。

「えーと……。俺のクラスは……」

正人も諦めたのか、掲示板で自分のクラスを探し始めた。

僕も危ないオーラを放つ相馬を、無視して掲示板に目を向ける。

僕のクラスは……。

『一年A組 齊藤 京介』

なるほど、ぼくはA組のようだ。

正人たちは何組だろう？

友人二人のクラスが気になった僕は二人に質問した。

「二人は何組だった？」

「俺はAだった」

「ん？俺もAだったぞ」

僕の質問に答える、正人と現実に戻ってきた相馬が自分の組を言う。どうやら僕達三人は同じクラスらしい。

「それじゃあ、さっさと行こうぜ」

「うん、そうだね」

「ああ」

正人の言葉で教室に向かう僕達。

教室に入るともうかなりの人が黒板に書いてある指定の席に座っている。

僕たち三人も黒板を見て自分達の席の確認をする。

「よっし！俺は一番後ろだ」

「僕は窓際だね」

「げ、俺は一番前かよ・・・」

正人は一番後ろの席で、僕は窓際。

相馬は残念な事に一番前らしい。

テンションが高くなった正人に対して、相馬はテンションが下がったようだ。

たしかに一番前ついていやだね。

それから僕は指定された席に座り、先生を待つ。

すると十分ぐらい経った頃だろうか？教室の扉が開き

ポニーテイルでスーツを着た、女性おそらく先生だろう。

先生は僕達を見回した後、教壇の前に来る。

「私の名前は、東条^{とうじょう} 楓^{かえで}という。

一年間よろしく頼む。

それから入学式で校長に言われたと思うが、私からもう一度、言わせて貰おう。諸君！魔法学校夕凧によっこそー！」

ここから僕の高校生生活が始まった。

1話 魔法書

「入学式のとくに、今日の予定が書いてあるプリントを貰ったと思いますが、

今日の午前中は一般授業で、午後から身体検査なので女子は女子専用の更衣室。

男子も男子専用の更衣室を使ってください。連絡は以上です」

先生の説明が終わったようで、先生はそそくさと教室を出て行ってしまった。

はあ。プリントで知っていたとはいえ、今日は一般授業だけというのはつまらない。

夕風のような魔法学校は高校しかなく、小学生や中学生は法律により習う事ができないのだ。

小学生や中学生の年齢で習う事ができるのは飛び級をするような国の認めた天才児ぐらいだろう。

僕は残念な事に凡人で、今まで一般の授業や、魔法に関しては魔法犯罪と魔法の危険性についてしか、教えてもらう事が出来なかった。だから魔法学校に入

れてようやく魔法

が使えると思っていたのに・・・正直残念だ。

一気にテンションが下がってしまった僕は机につつぶす。

しばらくすると、誰かが僕の席に近づいてきたようなので顔を上げる。

「おい、京介。いいことを教えてやろうか？」

僕の所に来たのは正人で、よほどいい情報を得たのかとてもいい笑

顔をしている。

殴ってもいいかな？

「いいことって？」

「お前の事だから、今日魔法が習えなくてガッカリしてるんじゃないかと思ってな、

ちよつとそこらへんで情報収集してたんだよ。そしたらさ・・・」

「そしたら？」

「そしたら、この学校は自由に放課や放課後は魔法書を見る事が出来るらしい。」

「本当！？」

魔法書は観覧許可がないと普通は見れないのだがこの学校は違うらしい。

さっきまで低かったテンションが、正人のおかげでかなり上がった。くそ！誰だ、さっき僕の親友を殴ろうとしていた外道は！？僕がミンチにしてやる！！

「おい、京介。昼ごはん食べに屋上に行こうぜ！」

「そうだな、早くしないと席がなくなる」

一般授業が終わり相馬と正人が片手に弁当を持ちながら、お昼に誘

ってきた。

しかし残念な事に、母さんが弁当を作り忘れてしまったので食堂に行かないと行けない。

「ごめん。今日は弁当がなくて食堂なんだ。

二人は屋上に行つてて」

誘つてくれた二人には申し訳ないが断つて食堂に行く事を話した。

「そうか、弁当がないならしょうがないな。食堂には弁当の持込が禁止されているし」

「そうだな。じゃあ、また後でな」

そう言つて正人と相馬は屋上に行くため、教室を出て行つた。

さて僕も食堂に行くかな。

ポケットにサイフがあるかを確認して、食堂を目指す。

食堂は一階にあるため、一階に教室がある僕ら一年は近くて助かる。二年や三年だったら階段をワザワザ降りなければならぬからね。ん、なんだあれ？

C組の近くにある、一室の物置の中から何か光つたような気がした。光が気になってしまった僕は物置の扉に手を掛ける。

ガラ

「・・・開いてる」

簡単に開いた扉。

部屋の中は資料のような本がたくさんあるが奥の方が暗くてよく見えない。

気のせいだったのかな？

すると奥の方で小さな赤い光を見た。

僕は先生がいないことを確認し光に近づく。

光の正体は一冊のボロボロな本だった表紙には見たことのない言語でタイトルが書かれている。

何かの魔法書だろうか？

本が崩れないように丁寧に開く。

カアアアアアア！

「え！？ちょ、ちよつと！！」

強烈な光が本から放たれて戸惑う僕だけど、だんだん光が弱まり目をあげると、眩しかった光は完全に消えて、

手に残ったのはただのボロボロの本だけだった。

なんだったんだろう？

考えてもわからなかったから本を戻し、食堂に行く事にする。

2話 ギフト

物置から出て、食堂の近くまで来た僕だけ……。

目の前には沢山の人が集まっていて。今朝の掲示板前の状況を思い出す。

どうしよう。さすがにここまで込んでいるとは予想外だった。

こんな事なら本なんて気にしないで真っ直ぐ食堂に来ていればよかった。

もし、過去に戻れるなら。物置に入ろうとする僕を、張り倒している所だ。

しかしこの人ばかりはやけに騒がしい。

もしかしてトラブル？

うーん。ここからだとは良く見えない……。

「お！ここだ、ここだ！」

「おお、本当だ！もしかして始まっているんじゃないか！？」

「見に行こうぜ！！」

「サヤ様の勇姿は絶対にカメラに収めて見せるわ！！」

お昼を諦めて教室に帰ろうと思った時、後ろから沢山の生徒が押し寄せてきた。

「え！？ちょ、ちょっと！！」

押し寄せてくる人の波から脱出しようともがいてみたが、集団と個人。

とてもじゃないが抜け出す事は出来ず、どんどん奥へと流されてしまう。

ちよつとおおおお！！僕は離れたいんですけどおおおお！！人の波に流され、どこかに勢いよく押し出されてしまう。

良かった！これで人の波から開放されると思ったのもつかの間。

勢いよく押し出された僕は、

目の前に腰まである長く黒い髪的女子生徒に突っ込んでいつてしまう。

やばい！このままだとぶつかっちゃう！

「危ない！」

そう叫んだとき女子生徒は振り返って、突っ込んでくる僕の存在に気がついたがもう遅い。

僕は女子生徒に抱きつく感じで倒れてしまう。

いやっほおおお！！ってちがう！！

早く離れないと入学早々変態にされてしまう！！

「なんだてめえ！？俺の邪魔をしてんじゃねーぞ！！」

女子生徒から慌てて離れると、赤い髪に腰についているチェーン、そしてパンツが見えるくらい下げられたズボン。

制服の袖にあるラインの色が青色だから三年生か。

ちなみに赤だと僕ら一年生で、黄色だと二年生だ。

しかしこの三年生は不良だろうか？正直ダサいと思う。

そして、何か僕に怒っているようだけど見当がつかない。

何を怒っているのだろうか？カルシウムが足りてないのかな？

「無視してんじゃねーぞ！！」

どうやらこのダサ男先輩「今、命名」が何を勘違いしたのか僕にメンチを切っている。

正直、他の人はこの人にメンチを切られて、怖いと思うのかは知らないが、

僕にはダサ男先輩は格好がダサすぎてちつとも怖くない。

不良と言うよりむしろ、下っ端Aという感じだ。

「君、助けてくれたのは嬉しいが、魔法習得をしていない一年生が割り込むのは危険だ。

私は大丈夫だからここから離れる」

横から聞こえた、綺麗な声に振り向くと十人中十人が美少女と答えそうな女子生徒がいた。

長い黒髪から察するに、さっき僕が押し倒してしまった人だろう。

袖のラインの色は黄色、つまり二年生という事になる。

それにしてもすごい・・・。

僕は彼女のある一転部分に目が釘づけになってしまった。

本当に・・・、本当に凄い・・・。

おっばいだ。

そう、彼女の胸にある女性特有の膨らみは、まるでグラビアのアイドルなみの大きさだった。

表現するならダブルメロン！！

「聞いているか！？君！？」

「はっ！」

僕が先輩のダブルメロンに夢中になっていたが、先輩の言葉で意識が覚醒する。

いけない、いけない、僕は誰もが認めるパーフェクト紳士だ。

けっしていやらしい男じゃないはずだ。
とりあえず先輩に謝らないと。

「いいかげんにしろよ……！てめえ……！！」

炎よ！我が手に集いて、敵を焼き尽くせ！！『フレイム』！！」

さっきのダサ男先輩の怒号が聞こえ

振り返るとダサ男先輩は僕らに手のひら向けて魔法を放ってきた。
ちよつとおおおおお！！

炎の魔法は真つ直ぐ、僕と先輩に襲い掛かってきた。

「風よ！壁となり我を守れ！！『エアール』！！」

とつさに先輩が呪文を唱えて、魔法を使い。

僕達を囲む小規模な竜巻が発生しダサ男先輩の魔法を打ち消す。
すごい……。

これが魔法戦闘……。

「君、私が五秒数えたら魔法を解くから、走って逃げるんだ」

「は、はい！」

先輩が僕の耳元で指示をもらい、逃げる準備をする。

でも先輩は大丈夫なのだろうか？

少しの不安があつたが先生も、もうすぐ来るだろうと思い、その考えを振るつた。

「カウントするぞ……1……2……」

先輩がカウントを取り始めた。

僕は足に力を込める。

「3・・・4・・・5!!」

先輩が5と言った瞬間足に溜めていた力を一気に使い走る。
走るが・・・。

ドゴ!

「ぐふ!!」

走るときの腕が大振りだったせいか、
近くで見物をしていた野次馬の一人の腹に見事ヒットしてしまった。
しかも、野次馬は倒れ気絶してしまったようだ。
しかし、これはしょうがない事だと思う。

どう考えても近くにいたやつが悪いとしか言いようがない。
でも一応、形だけでも後で謝っておこう。

一応忘れないために、僕の黄金の左の被害にあったと思う人を見る。
被害者はミドリの髪にパンツが見えるくらいズボンを下げた、どこ
かで見た事がある

ダサファッションの男だった。

うん、すぐに忘れよう。

カアアアア!

ミドリのダサファッション君の近くで魔法陣が少しずつ展開される。
え!?何!?何なのこれ!?

「てめえ!よくもタカシをやってくれたな!!おかげで不意打ち用の召喚魔法が

発動しちゃったじゃねーか!！」

「貴様!! 一対一じゃなかったのか!!」

「うるせー! てめえのようなバケモノ相手に正々堂々なんてやっ
られるか!！」

「貴様・・・!」

ダサ男は作戦がバレ、非難する先輩に逆切れし、先輩にバケモノと
言って罵る。

そして罵られた先輩は・・・プルプルと震えていた。
それが怒りなのか、悲しみなのか。僕にはわからないけど・・・。
一つだけ僕にもわかる事がある。

アイツは先輩を・・・。美少女を傷つけたという事だ。
じゃあ、僕はどうする?

そんなの決まってる。

あのクソ野郎をぶん殴る!

魔法? そんなの関係ない!! ぶっ飛ばしてやる!!

『へえ、お前は変だけど面白い奴だな』

頭に誰かの声が響く。

しるか! 今そこどころじゃないだ!!

電波にかまっている暇は僕にはない!

『おいおい、せっかくいい事教えてやろうと思ったのにいいのか?
あの赤い頭の小僧をぶっ飛ばしたいんだろ?』

ぜひ、貴方様のお話をお聞かせください。

これはきつと神様のお告げだ。

日ごろ行いのいい僕にアドバイスをくれるのだろっ。

『・・・急に低姿勢になったな』

はて？なんのことやら。

『まあいい、小僧。お前は力が欲しいか？
欲しいなら今この場で小僧を最強の男にしてやるぞ？』

おお！なんと嬉しい提案。

しかしただより怖いものは無い。

もしかしたら代償があるのかもしれない。

『安心しな、代償はねえよ。』

それよりも早くしたほうがいいんじゃないか？

もうすぐ召喚魔法が発動するぞ』

え？

召喚魔法があつた場所を見るとたしかにもうすぐで魔法陣が完成し
そうだ。

たしかに早くしたほうがいいのかもしれない。

『おい！いるんなら『ギフト』、いらないんなら『ロスト』、

ちなみに『ロスト』を唱えると力を得るチャンスは永遠に失われ、

俺も消えて、もう小僧に話しかけることはねえよ。

ほら、早くしやがれ！！』

そう謎の声に怒鳴られると同時に召喚魔法が完成し魔法陣の中から
頭三つの黒くて、でかい犬が現れた。

うそでしょ……。アレは……。

「ケ、ケルベロスだ……！！」

「キャ……！！」

「逃げろ……！！」

G u a a a a a a a a ! !

召喚されたのが危険度Sのケルベロスだと理解すると、取り囲むように見ていた野次馬達が、蜘蛛の子を散らすように逃げていく。そしてケルベロスは咆哮し、何故か僕を縦に割れた瞳で僕を捕らえる。

やばい！僕、絶体絶命じゃん！！

もう、迷ってられない！！

えーと、呪文なんだっけ？

パニック状態に陥っていたせいか呪文をド忘れしてしまった。
ヤベー……！！

『落ちて着けバカ、ギフトだ』

そうそう！それ！！

僕は息を吸い込み唱える。

「『ギフト』」

G a a a a a a a a a ! ! ! !

僕が唱えると同時にケルベロスも咆哮し、僕に突っ込んでくる。
あれ？何もおきな・・・。

ドクン！

2話 ギフト（後書き）

これからも頑張りますので応援よろしくお願いします。

面白い、期待が持てると思ったら評価をくれると嬉しいです。
評価をもらえれば作者のやる気にも繋がるのでよろしくお願いします。

3話 プロミネンス（前書き）

1000PVありがとうございます。
とても嬉しいです！

3話 プロミネンス

ん？なんだろうこの感覚？

なんか体が軽い。

それに力があふれてくる・・・。

こっちに向かって来るケルベロスに対しても、さっきまでは怖くてしょうがなかったのに

今は全然怖くない。

どういう事？

『それがお前に与えた力だ。ほら、さつさとあんな雑魚なんか魔法で消し炭にしる』

よし！つて、僕は魔法使えないよ！

『はあ！？ったく！しょうがねえな、俺も時間が無いんだが今回だけだぞ！？』

う・・・。お願いします。

一年だもん。しょうがないじゃん。

『男がだもんとか言ってるじゃねえ！

つて！やばいぞ、小僧！動けないでいる後ろの女を担いで近くの窓から外に出ろ！』

確かにケルベロスは僕の近くまで来ている。

恐怖は感じないけど危ないと頭が理解する。

僕は後ろを向き、ケルベロスへの恐怖でカタカタと震えている先輩に急いで近づく。

「おい、先輩。ここから離れるぞ。」「先輩！ここから離れましょう！！」

「へ？きゃー！？」

多少自分に違和感を感じたが先輩を無理矢理お姫様抱っこして窓から校庭に出る。

先輩は自分の状態を理解するとさっきまでの雰囲気とは違う、かわい悲鳴を上げた。

たまりませんね。

それにしても軽い。人一人担いでいるのにまるで羽のようだ。しかも走る速度もかなり速い。

そして何よりも、先輩の体が柔らかくて気持ちいいです。

『おい、早く女を降ろして、準備しろ。』

うつつ！とても惜しい、とても惜しいけど仕方が無い。

僕は心で涙を流しながら先輩を降ろす覚悟を決めた。

でも準備って？学校の壁は上級魔法一発でもそうそう壊れない特別製のはずだけど？

何故そのような特別なものを使っているかというと、

さっきの先輩達のように魔法戦闘を校内で行う

生徒が十年くらい前から、年々増加してしまった結果、

校舎が壊れないようにするための対策として作られたらしい。

そんな事は別にいい、とりあえず先輩を降ろそう。

「先輩、降ろすぞ？」「先輩、降ろしますよ」

「ああ・・・しかし、さっきの事といい、今のといい君は・・・何

者だ？」

僕が先輩を降ろすと先輩は恥ずかしかったのか頬を赤く染め、僕と少し距離を置き質問をして来た。

何者って？僕はただの一般人なだけど？

そんな事より、変な声さん。僕の口調について説明してくれない？

「そんなの後で教えてやるから、さっさとしろ！ 奴が来るぞ！！」

え？何を言ってるの？あの壁が早々に壊れるわけが……。

ゴガン！！

ケルベロスがいる校舎を見ると、破壊音と共に土煙が舞い、
 少しずつケルベロスが姿を現す。

ちよつとおおおお！！！
嘘だろ！！！！

G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
!
!

「きゅー……出てきたわー!!」

「誰だよ!!外にいれば安全とか言ったのは!!」

「やべえよ！もう終わりだよ！！」

「さよなら私、来世ではサヤ様のような美人に生まれてね」

「くそー！ー！！サ丫様のダブルメロンをこの手で掴むその日まで、死んでたまるかー！ー！！」

校舎の中でケルベロスを見て外に脱出したであろう生徒達が逃げまどう。

まさに地獄絵図。ていうか最後の人、アンタは男だよ。

『小僧、今から俺のとおっておきを教えてやる。

俺の言うとおりに呪文を唱えろ』

うん！っとその前に・・・。

「先輩、とおっておきをやるから離れたほうがいい。

「先輩、とおっておきをやりますんで僕から離れてください」

「・・・わかった。君が何者かについては後で聞こう」

僕が先輩に言っていると先輩は素直に下がってくれた。

これでよし！

『小僧、準備はいいか？』

もちろん！！

『小僧！手をあのバカ犬に掲げて火柱をイメージして唱えろ！！細かい所は俺がやってやる！！』

我が手に集うは紅蓮の炎』

「我が手に集うは紅蓮の炎」

僕はケルベロスに手を掲げケルベロスを焼き尽くす火柱をイメージしてをして、呪文を口にする。

『燃え上がり敵を、その業火で焼き尽くせ!!』

「燃え上がり敵を、その業火で焼き尽くせ!!」

ケルベロスはチャンスと見たのか僕の異変に気がついたのか僕に襲い掛かるために走り出す。
来るなら来い! 焼き尽くしてやる!!

『プロミネンス!!』

「『プロミネンス』!!」

僕が呪文を唱えると魔法陣がケルベロスを囲みその中心から炎が僕のイメージ通りに
火柱となり、燃え上がる。

G A A A A A A A A A A A . . . !!

ケルベロスは苦しみの声を上げて蒸発するかの用に消え、炎も対象が燃え尽きた為に消える。
ふう、これで一件落ちや...。

わああああああ!!

「む! 「え! ?」」

突然、後方からとんでもない歓声が校庭に響く。

「すげえ! すげえよ!! ケルベロスを倒しちゃったぞ!!」

「ちょっと！！彼の袖のラインを見て！！彼は一年生よ！！」

「すげえ！まじで何者なんだ！？」

え？ちょっと待って！！たしかに倒したけど僕じゃ・・・！！
なんとか弁解しようと思ったが目の前に先輩が現れ。

「さあ、ちょっと生徒会室に来てもらおうか？」

マジですか？

3話 プロミネンス（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからも頑張るので応援よろしく願います！

面白い期待が持てると思っていただけたら感想・評価をもらえる
と嬉しいです。

いただけたら作者の今後のやる気にも繋がります。出来たらいい
のでよろしく願います。

4話 疑惑

さて現在、僕は生徒会室に向かっていますが・・・。

「ねえ、あの子でしょう?」

「ああ、ケルベロスを一瞬で消し炭にした一年生」

「すげえよなー」

「先生に教えてもらうより、あの一年生に教えてもらったほうがいいんじゃない?」

「たしかにすごいけど怖くね?」

視線が痛いです。

『小僧、俺は少し寝るから、後よろしくな』

貴様! 僕を残して逃げるつもりだな!!
この卑怯者め!!

『ああ、それから俺のことは喋らない方がいいぞ』

え? 無視ですか? 堂々と無視っすか?
なんていうことだ、好青年である僕がここまで扱いが酷いのは初めてかもしれない!

『そんなことはどうでもいいが、マジで黙っていた方がいいぜ。』

じゃあな小僧』

え！？ちよつとせめて説明してからにしろー！！
その後、何度も頭に呼びかけたがダメだった。
くそ！本当に居なくなりやがった！！
覚えてろよ！謎の声め！！

「どうかしたのか？」

「いや、何でもない『いいえ、何でもないです』」

「そうか……。後、言い忘れていたが、私の名前は神宮寺^{じんぐうじ}沙耶^{さや}だ」

「俺は斉藤 京介『僕は、斉藤 京介です』」

そんなやりとりがあつて、気がつけば生徒会室の前。

それにしても、先輩が生徒会の役員だったなんて……。

生徒会とは、この学校の魔法実力者のトップ達だ。

その実力は折り紙つきで、下手をしたら先生クラスらしい。

そんな将来有望な人たちが集まるのが生徒会だ。

決める基準は、魔法成績で実力が拮抗し、定員オーバーなら、魔法決闘、『デュエル』

で決めるらしい。

そんな誰もが憧れ、入りたがっている生徒会の使っている特別室。
正直、とても入りたくない。

何故ならこの生徒会には……。

「じゃあ、入るぞ。……失礼します」

ガチャ

「キョウちゃんゝん!!」

がし!

「キョウちゃん、怪我は無い!?大丈夫!」

神宮寺先輩が扉を開けて入ると、生徒会長と書かれた立派な机に居た、肩まで髪を伸ばし

神宮寺先輩よりも少し小さくも、とても大きい、女性特有の部分を揺らして、

僕の知っている人物が僕に突っ込んでハグをして来た。

この女性は、この学校の生徒会長で、僕の義理の姉である齊藤綾さいとう あ香だ。やか

そう、義姉さんがいるから、僕は生徒会室に入りたくなかったんだ!!

ほら、周りを見てごらん。まるで時が止まったかのようだよ。あぜんと見ている、他の生徒会のみなさん本当に申し訳ない。

「あ・・・、あの。会長?」

あ!先輩!!今の姉さんに話しかけると・・・。

「何?私は今、キョウちゃんにハグして忙しいの、邪魔しないで・・・ね?」

「はい!」

怖い!笑顔がめっちゃ怖い!!先輩めっちゃビビッてるよ!!

このやりとりから、考えてわかると思うが、この姉は超が付くほどの
ブラコンでめっちゃかわいがってくる。

でも、昔はそんなに好かれていたわけでも無いのにいつの間にか、
こうなっていた。

まあ、これだけかわいがられていて、嬉しくないわけではないが、
少し自重して欲しい。

それから十分が経過して、ようやく落ち着いたのか、綾香姉さんは
会長と書かれた席に座り、今回の騒動に関する報告を先輩から聞い
ている。

「事件の発端は、私が食堂に入る時、上級生の男子生徒に呼び止め
られ、ナンパされた事です」

先輩の話を聞いて驚愕した。

まさかあのダサ男先輩、自分のファッションセンスにそこまで自信
があったなんて！！

しかし、周りの役員と思われる女子生徒たちはあまり驚いていない
ようだ。

それにしてもこの生徒会はすごい、まず、姉さんの隣にいるメガネ
をかけた、ショートヘヤーの、

これまたナイスバディな女子生徒、顔立ちも綺麗で、十分に、先輩
や綾香姉さんと張り合えるだろう。

他の役員の生徒達も見みると全員女子で誰もが綺麗と呼ばれるよ
うな女子生徒達だった。

しかし、なんで女子ばかりなんだろ？ここって共学だよね？

「その後、勝負を申し込まれ、断ったのですが男子生徒は、逆上し
こちらに攻撃を仕掛けてきました。

突然の事であったため、避ける事も出来ず、覚悟を決めました、
後ろにいる斉藤に

その・・・危険も顧みず助けられました」

あれ？僕って、転んで押し倒した、だけなんですけど。
訂正しようと思ったが、先輩の頬が少し赤いことに気がつく。
そうか、先輩は押し倒されたなんて、恥ずかしいから報告が出来ないから、

助けられた事になっているんだろう。

そういえば、押し倒した事、謝っていなかったっけ？

押し倒して離れたとき何か言われた気がするけど、ダブルメロンで覚えていない。

後で謝っておこう。

「あらあら。」

「ほう」

「へ」

「・・・春？」

「むっ・・・」

「ごほん！ほ、報告を続けます！！」

あれ、もしかしてバレてた？

しかし、周りの反応から考えると別に良かったようだ。
それにしても、春と言った、無口な女子生徒はどういう意味の発言なのだろうか？

他にもニヤニヤしている女子生徒も一人いるし。

綾香姉さんはかわいく唸らないで、恥ずかしいです・・・。

それにしても、謎の声はまだ起きないのか？
ちよつと呼びかけてみよう。

そろそろ、起きたか悪魔の声。

呼びかけてみたが、返事はない。

うーん、もっと集中すればいいのか？

心を閉ざし呼びかけに集中する。

「その後、男子生徒は風属性の魔法を使い。斉藤および私に攻撃を放ってきましたが、

私が同じ属性の魔法で防御し、斉藤を逃がそうとしましたが、斉藤は私に召喚魔法で

奇襲しようとしていた、男子生徒の仲間だと思われる、男子生徒を素早く体術で

無力化しました。」

「さすが、私のキョウちゃん」

むう、やっぱり反応がないか・・・。

あれ？今、呼ばれたような・・・気のせいか？

謎の声を呼ぶのに集中していたため、聞き逃してしまった。

でも、僕が今更、聞くようなことじゃないよね？

「しかし、召喚魔法はあらかじめ準備されていたものらしく、術者が意識を失っても魔法は

発動してしまい、危険度Sのケルベロスが召喚されました。

野次馬をしていた、生徒達は外に非難しましたが、ケルベロスは私と斉藤を標的にして向かってきました。

私は恐怖で動けず。斉藤に、かつ、抱えられ、窓から外に脱出しました」

「なるほど、それで沙耶ちゃんがお姫様だっこされてたんだね。じゃあ、もう報告はいいよ」

ちよつと待てい！バカ姉さん！！

もしかして、一番聞きたかったのはそこだけで、後はどうでもいいの！？

正直、突っ込みたかったが口調の変化が姉さんにバレないように我慢する。

「会長……。さすがにそれは……」

おお、メガネの人が姉さんに突っ込んでくれた。これで少しは自重してくれる……。、といいな。そんな淡い期待を抱きながら、姉さんを見る。

「いやいや。実際に、もう聞く事ないよ。その後のことは私達、教室で見たいし」

「……たしかにそうですが。いえ、分かりました」

あれ？以外だ。

どうやら、少しは真面目らしい。

自宅でもこの真面目さが、あつたらどんなにいいか。

いや、家にはこの綾香姉さん以外の姉や妹がいる。

綾香姉さん一人がまともになったところで僕の苦勞は変わらないだろう。

「沙耶さん。報告はもういいですね？」

「はい。しかし、副会長、二つの疑問があります」

「ええ、分かっているわ、ここに居る一人を除いて全員、思っているから」

メガネをかけた女子生徒と、神宮寺先輩の会話から考えると、メガネをかけた

先輩は副会長らしい。

たしかに副会長もしくは会長な、感じがする。

しかし、疑問を感じていないと言うのは誰だろう？

少なくとも僕は疑問だらけだ。

おそらく僕のことではないだろう。

「まず、疑問の一つ目。三年でもたいした実力を持っていなかった、男子生徒が

ケルベロスを呼んだこと。二つ目は・・・入学して間もない彼が、あれほどの大呪文を使えたという事だ」

副会長は僕に向けてギラリと瞳を鋭くし睨み付ける。

あー、確かに。

この場にいる全員の視線が僕に集中する。

あれ？もしかして僕かなりやばくない？

4話 疑惑（後書き）

もし、面白い期待など持てると感じましたら、評価・感想をくれると嬉しいです。

これからも頑張っていくので、応援よろしくお願いします。

5話 思い出。

「さて、斉藤 京介くん。説明してもらおうか？
何故君が、あのような大呪文を使えたのかを」

副会長が僕を睨み、尋ねる。

やばい、本格的にヤバイ。

正直に話せば頭の狂った、幻聴が聞こえる男と認識され。
さらに、謎の声曰く厄介になる。

厄介の内容は、聞かされていないけど。

でも、どうすればいいのさ！！

「蓮ちゃん、キョウちゃんの事なら私が説明するよ。
キョウちゃんもそれでいいよね？」

おお、天の助けならぬ姉の助け。

これは、ありがたい。

こくと頷き、姉さんを見る。

そして任せなさい！といわんばかりに豊満な胸を張る、姉さん

「それでは会長。説明をお願い出来ますか？」

「うん」

さあ、どんな風に話すのか、みんな姉さんに注目する。

頑張れ！姉さん！！

僕は姉さんが何とかしてくれると、期待を胸に、静かに耳を傾ける。

「キョウちゃんはね、昔から難しい魔法書を読んで、周りに気づか

れないように
訓練していたんだよ!!」

どうだ、と言わんばかりに姉さんが宣言する。

確かに、この言い訳なら通るかもしれないが大嘘にもほどがある。
確かに死んだ父さんの魔法書を僕の部屋で保管しているが、

どれもこれも難しく、読む事すらできなかった。

でも意外と、この嘘を周りは信用しているようだ。

この学校で教師と張り合える可能性がある、生徒会のトップの言葉
だからか、

もしくは、姉さんの日ごろの行いか、どちらにせよこれで助かった
と見ていいだろう。

帰ったら、肩でも揉んであげようかな？

「そうですか……。わかりました。それじゃあ斉藤君。もう帰っ
ていいですよ。」

そう、副会長の連さん？に言われ。

無言で頭を下げて、部屋を出る。

さて、あの騒ぎで学校も終わったし、さっさと帰ろう。

そう思い自分の荷物を取りに行くために教室に向かうのであった。

一方その頃、生徒会は……。

「で？会長。あの話は本当ですか？」

生徒会長である、綾香は信用しているが、斉藤京介はあまり信用し
ていない

副会長の西条 連が綾香に質問をする。

もしかしたら、溺愛している、弟を庇うためにあんな嘘をついたの

かもしれないと。

日ごろの綾香なら信用は出来るが、弟が現れた、時に見せた態度を考えると

そのように、考えてしまうのはしかたがないだろう。

「ええ本当よ。」

京介がいなくなったところで、綾香が生徒会長の顔をする。

今の表情や態度をみれば、京介はきつと家でもそうであって欲しいと心から思うだろう。

「それですか」

「そうよ……。」

綾香は背もたれに預け思い出す。

初めて、京介が魔法を使った、所を。

アレは私が12歳の時の事だ。

夏休みが始まったときのある日、妹達と公園で遊んでいると、同じ学校の男子が父が京介の母と最近、再婚した事で、からかってきた。

一番小さい妹は泣き出し、一才下の妹も怒りで震えている。

私は、我慢の限界が来て一番近くにいる小太りの少年を殴ろうとした時。

「『ファイヤーボール』!!」

その掛け声と共に小さな火の玉が私と小太り少年の間を通り。

ドッカーン!!

大爆発を起こした。

私はその光景を見た後、火の玉が飛んできた方を見る。
そこにいたのは、お祭りで売っていきそうな狐の仮面をつけた少年だった。

お面は辺だったけど、まるでテレビで見るようなヒーローのようだった。
かっこよかった。

「てめえら! その三人をいじめたら、ぶっ殺すぞ!!」

「わーーーー!!」

「こえーーーー!!」

「おかーさーん!!」

私達をからかっていた少年達の声が聞こえ、少年達を見る。
どうやら恐怖のあまり逃げ出したようだ。

私はお礼を言わないと、と思い狐のお面をつけた少年の方を見るが
少年はいなかった。

正体を隠し、名前を名乗らず去る。

本当にヒーローのような少年だった。

聞こえるかどうか分からないけど御礼を言っ

私達は真っ直ぐ、家に帰った。

家に帰ると私達は、汗を流そうとお風呂に行くが、脱衣所に入ると
誰かが先に入っているようで、シャワーの音が聞こえる。

「ああ、今は京介が入っているから、ちょっと待っててあげてね」

新しい、お母さんに言われ。しょうがない後で、入ろうと妹達に言
って、脱衣所を出ようと

した時に、ふと、籠の中に入っている、服に目が留まる。
それは、私達を助けてくれた少年の服にそっくりだった。

偶然かなと思ひ、廊下に出てみたが、やはり気になった私は京介が
お風呂に入っている間に

こっそりと京介の部屋の中に入る。

初めて京介の部屋に入った私は、かなり驚いた。

棚には沢山の魔法書があり・・・そして勉強机に無造作に置かれた狐
のお面。

間違いない、少年は義弟の京介だった。

その後、京介がお風呂を出てきたと教えに来た妹達も京介の事を知
り。

とりあえず見なかった事にして、お風呂に入る。

体を洗っている一番下の妹が。

「ひなた、京介お兄ちゃんのお嫁さんになるー！」

と無邪気に言い出した。

そして、それに対抗して私や次女も似たような事を言っ
て騒いだ。
その日から、私は・・・いや、私達は京介に恋をした。

一方、その頃の京介は

自宅に帰ったと同時に口調が直り。

部屋で中学で使っていた教科書や制服を片づけをしている。

「さてと、中学の制服はふすまにあったダンボールにでも仕舞うか
な」

ふすまを開けて、中から大きなダンボールを取り出す。
中を開くと懐かしいものが出てきた。
それは、狐のお面。

「あゝ、これは懐かしいものが出てきたな」

お面を手に取りこれを、手に入れた日の事を思い出す。
そう、それは11歳のときの事。

小さな神社でやっていた小さな祭りで福引に2回挑戦したが、
お面と、ロケット花火一本をもらった。

本当は一等のゲーム機が欲しかったのだが、しかたがない。
夕方にもなってきたし家に帰ろうと、来た道を歩く。
すると公園の近くに来たとき。

三人の女の子をからかっている、少年達が見えた。
気になり物陰で見ていると。

最近、家族になった女の子達だった。

助けたいと思うけど相手は三人、どう考えても僕に勝ち目はない。
どうしようか、考えていると足元にライターが落ちているのに気が
つく。

そこで、一つの作戦を思いついた。

このロケット花火を僕の魔法って事にして、次はお前達に撃つぞ！
的な事をいえば、きつと逃げていくに違いない。

幼い僕は本気でそう思い、作戦を開始した。
後で復讐されないようにお面をつけて、ロケット花火で狙いをつけ
て火を点ける。

狙いは、姉さんと小太りの少年の間。

手元が狂っても十分に距離があるし大丈夫だろう。

花火が発射する、少し前に『ファイヤーボール』と唱えて、花火が
発射される。

花火は予定通り、二人の間を通過して飛んでいく、しかし、ここで予定外の事が起こる。

花火の先にドラム缶があり、花火がぶつかって、ドラム缶が爆発したのだ。

啞然として、このまま逃げようと思ったが姉達に見つかってしまう。仕方がないから、やけくそになった僕は。

「てめえら！その三人をいじめたら、ぶっ殺すぞ！！」

「わーーーー！！」

「こえーーーー！！」

「おかーさーん！！」

作戦を続行し、逃げ出す少年達を見ている姉さんたちの隙をみて家に逃げ帰った。

お面を机の上に放り出して。汗だくになった体を、綺麗にするためにシャワーを浴びた。

シャワーを浴びた後、姉妹三人もお風呂に入ったが、出てきた後にすごい懷かれ、

それが変わることなく今も続いている。

僕の正体はバレてないはず……。三人に一体なにがあったのだろうか？

5話 思い出。(後書き)

感想・評価をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5370v/>

まほ×がく

2011年8月26日10時27分発行